

# 世界最初の露和辞典をつくった 薩摩の若き漂流民ゴンザのこと

吉 村 治 道

館長様より身に余る御紹介を頂き恐縮でございます。私は最近ゴンザに似て来たと言われます。NHKの対談でもそう言われましたが、ゴンザが余りヨカニセ(男前)でないのも、喜んで良いのか悲しむべきか？お手許のレプリカと比べて私の方が男前だとおっしゃる方が若し一人でもおいでなら、正絹の白生地一反無料で最後に差し上げます。唯ビンタ(頭)は遠く及ばないのが残念でございます。実は、私が余りにもゴンザに夢中ですので家内が呆れ果て、屋号を「キモノよしむら」から「キモノゴンザ」に代えたらと申しますので、唯今検討中でございます。本夕は失礼ながら、お身体の御不自由な方や、うんと御年配の方まで、御出席、しかも満席で心中感激にむせております。

さて本日は、私のような者にゴンザの話をとの事でございますが、ウゼケン大学つまりアリマセンモン学校しか出ておらず、浅学非才おもはゆい限りでございます。しかし一人でも多くの方々に天才少年ゴンザの偉業を知って頂きたいという願いから、敢えてお話申し上げます。起承転結もままならぬ原稿ですが、花の命は短くて苦しき事のみ多かりしゴンザを思えば、遂涙声になりますので、態と一瀉千里半ば棒読み致します事をお許し下さい。

就きましては、私がどうして吾が戦友ゴンザの事を知るようになったかが分かります様に、先ず自己紹介をさせていただきます。

私の出身は、伊佐郡菱刈町本城で、終戦後はじめて電灯がついた全くの片田舎でございます。そして、十二人生まれて八人育ったという程の貧乏子沢山の家庭でございます。旧制の中学校へ行きたくても金が無くて行けなかったのであります。大変に厳しい父で、「正しいことなら喧嘩しても絶対に負けるな！耳にかみつけ！ミンチャベ、カンチケ、世の中はすべてチェスト・イケだぞ」と教えられました。少年時代から多情多感、戦友の歌を唄い乍ら涙した思い出があります。担任の南網次（今隼人町で御健在ですが）先生が「自分の後継ぎにしたいから、師範学校を受験しないか」と何回も奨められるのを振りきって、十五才、高等科三年の夏休みに単身満州（今の中国東北地方）へ、それも五年生の時、井戸で冷水浴をする事を教えて下さった、宝蔵保先生の後を追ひ、青雲の志を抱き、雄飛致しました。約七ヵ月間、電報電話局の雑役をしてためた金で、昔の通信講習所（のちの電々学校）で一年間、電信の勉強は勿論、中国語や英語、会計や数学、電機、地理・修身・公民などを習いました。

その後、六年間電報局へ勤め、三ヵ月間兵隊に居りまして、シベリアへ四年間抑留され

た訳であります。そこで、ロシアの囚人にこき使われる訳ですが、憩うべき営舎に帰ると、古いばかりで階級が一向上がらなかった古参兵にリンチを加えられ、十二人位の初年兵の中で僅か二人だけが生き残りました。何故、この中の一人になれたかと言いますと、私はタバコを吸いませんで配給されるのを上官へ差し上げておりましたが、その為か、炊事勤務に指名され栄養失調を免れた訳でございます。そして、そこを辞めさせられたら命にかかわると思い、必死にロシア語を勉強しました。勿論、独学です。先ずは英語で言う「デイス、イズ、ア、ペン」式でロシア人に、「これは何か？」つまり「シトー、エト」と尋ね、「エト、タポール」即ち「之は斧です。」という具合に一つづつ覚えてゆきました。そして、チフスで入院しました処、同室に、今、指宿在住の湯通堂長大というロシア語の専門教育を受けた方が居りまして、文字や文法を教わり、その後収容所長の当番兵等をさせられて重労働につく事も無く、他の兵隊が休み時間にタバコを吸う間も、私は寸暇を惜しんで勉強を続け、遂に、通訳と呼ばれる様になり無事帰国できた訳です。

つまり、キリストが言う通り「はじめに言葉ありき、言葉は神なりき」で、言葉によって救われた訳です。そして又、古事記によりますと、言葉は言霊、と書いて、言葉には靈魂がこもっている。それをことだまと読み、それが詰まってこだまとなって返って来るのだそうでございます。例えば、此の度のゴンザの辞書里帰りも、声の代わりに靈のこもった記号、即ち文字でロシアの大統領へ訴えたのが、こだまとなって返ってきた訳であります。

さて、愈々本題のゴンザの話ではありますが、カムチャッカ地誌というロシアの古い文書によりますと、今から約二七〇年ほど前、帝政期のロシアでサツマ語に関する本が、一万二千語に及ぶ語彙を駆使して立て続けに出版されております。「ロ日語彙集」「日本語会話入門」「簡略日本文法」「友好会話手本集」など、しめて八冊、その内の一冊は二冊分を一緒にしてありますので、計七冊。他は、超ミニサイズのゴンザ手書の聖書があります。これらの本の存在は、長い間忘れられておりました。それが日の目を見、学問的価値が認められるようになったのは、つい三十年ほど前の事です。昭和三十八年十月、鹿児島大学で開かれた、第十九回日本人類学会、日本民族学会連合大会で、村山七郎氏（元九大教授）によって紹介され、大きな反響を呼ぶことになりました。

この一連の仕事が短い期間に集中し、その後長い間埋もれる事になったのには理由があります。著者はレニングラード、今のサンクトペテルブルグにあった帝室科学アカデミーの司書補アンドレイ・ボグダーノフともう一人、デミアン・ポモルツェフと名乗る日本人でしたが、十二月十五日楽しかるべきクリスマスや正月を目前にしてデミアンは一七三九年二十一才の若さで病没します。この年は、記録的な寒さだったそうであります。彼らの仕事が忘れられたのは、できが悪かったのではありません。村山氏は、「何らの参考書も無く、実に立派な仕事をなし遂げた」と『漂流民の言語』という本で高く評価しておられます。実は、デミアンこと日本漂流民ゴンザの日本語に問題があったのです。ゴンザは、

はえぬきの鹿児島人で、方言しか知らなかったのであります。そして、ロシアの方でもゴンザの言葉が普通の日本語でなく、特別難解なサツマ辯だとは知らなかったのであります。

ご承知の通り、ロシアは常に不凍港を求めての南進政策、いわゆるウラジヴォストーク、東方を征服する東漸政策そのものを表現する地名がある事からして、日本の軍事や文化の調査研究は、重要な問題であったのであります。それにしても、第二次大戦中、二年半もの永きにわたってドイツ軍に包囲され、六十万人の戦死者と七十万人の餓死者を出しながら、ゴンザの辞書を地中に埋めて守ってくれたという事に対しましては、主義主張を超えて脱帽せざるを得ません。この作業には、同じ科学アカデミーのエトロワという女性学者もその辺の事情を詳細に体験していたのですが、一九九三年つまり昨年、老衰の為、九十二才で亡くなりました。ゴンザ・ソーザの肖像画の事も知っていたのですが、それだけに肖像画の行方の解明も急がれる訳であります。私もすでに七十才。幾ら計算しても先が短いので、更に深い研究者が欲しいのです。

私は、十八年前モスクワやレニングラードへ行き、エルミタージュ美術館や夏の宮殿を見まして、貴重品が沢山ある事にびっくりしました。それらも全部地中に埋めて守ったのだそうでございます。勿論、私はその時迄は、ゴンザの事は分かっておりません。発見は、全く村山先生のご尽力の賜であります。

ゴンザの著した本は、実は「露薩語彙集」「薩摩語会話入門」とでもいうべきものです。おかげで、われわれは十八世紀前半にどのような鹿児島弁が話されているかを克明に知ることができます。

例えば、「日本語会話入門」見ますと、

キョニヤ オノ オイヤル

(主都には王が住む、というロシア語の文例を、京には、王の居りやると訳してあります。)

テコウチャ テコ タタク (太鼓打ちは太鼓をたたく)

フイエフキャ フイエヲ フク (笛吹きは笛を吹く)

ファタサシャ ファタ フィロゲラル (旗手は旗を広げる)

アシガラ チェップヂェ イエル (兵士＝足軽＝は銃でうつ)

ロシア語の文例をゴンザが逐語訳したために、原文では語順が転倒したものもありますが、一見しただけで、紛れもない鹿児島弁とわかります。

ゴンザの素性はよくわかっておりません。旗さしや足軽に対して「広げらる」「射らる」という敬語法を持って遇している事から、それよりも低い身分であることは先ず想像できます。ロシアに残された文献では、薩摩と呼ばれる日本の町で生まれ、そこに住んでいた船乗りであったといえます。さらに、くわしくみますと、ゴンザとその父、おじのソーザ<sup>(手代)</sup>ら十七人は(此のソーザは或る店の番頭とも言われますが)一七二八年(享保十三年)十

一月、今から二六七年前、薩摩から大阪に向け出港したことになります。積み荷は米や紙、布、書物、紫檀など、松平大隅守（第二十二代藩主島津継豊）の命で、大阪の薩摩屋敷に届けるべき品物でありました。この時ゴンザは十一才。舵取り（今で言えば一等航海士でしょうか）の父が見習いの為に乗せたと言われ、これが初航海だったかも知れません。ロシアの古文書カムチャッカ地誌によりますと、舟の名はゴンザの発音そのままです。アヤンク丸即ち早行丸と記され、明治十七年刊行の外交志稿には若宮丸と記され、村山元九大教授はこれを若潮丸が正しいとされていますので、恐らく縁起をかついで、早行丸とも称されたのではないのでしょうか。鹿児島市の美術館と川内の歴史資料館に、早行丸と明記された絵図面が残っています。但し、川内のは模造品です。此の舟は恐らく川内の久見崎軍港で造られたのであり、出港地も前の浜となっていますので、その点からでは、鹿児島市か喜入町の「前の浜」ではないかと推測されます。

此の舟は、薩摩を出帆後十一月八日嵐に遭遇、八日間も悪天候の中を風波にもまれたあげく、遠く大洋へ吹き流されます。六ヶ月と八日間の漂流の末、カムチャッカのロパトカ岬に漂着。一七二九年享保十四年六月三日であります。間もなくコサックの五十人隊長、アンドレイ・シュティニコフの指揮するカムチャダル人の略奪に遭い父を含む十五人が殺され、一七二九年腕に負傷したゴンザと、水中から引き上げられたソーザの二人だけが生き残り、二年間酷使されます。この事実は、代官ノヴゴロドフの知るところとなり、隊長は死刑となり、ゴンザとソーザの二人はペテルブルグへ送られた事になりますが、二年かかって漸く到着します。私も体験しましたが、シベリアの大自然の厳しさは、南国育ちにとってはまさに生地獄と言える時もあります。今のように良い道路は無い筈で、せいぜい犬やトナカイ・馬のそりで、それこそ、雲煙万里遙か西のさい果てまで、夏には、想像も出来ないブヨの大群に襲われ、冬には、零下五～六十度に下がる大雪原を横断した訳です。零下五～六十度になると、御承知の通り、ダイヤモンドダストと言いまして、空気中の水分が結晶状になり、キラキラ輝き、道が分からなくなります。風速一米で一度気温が下がる感じで、体力も相当消耗し、ゴンザ、ソーザの早死につながったのではと考えられます。幸いに、ペテルブルグの迎賓館で女帝アンナ・イワーノブナの接見を受けます。その時、見事にロシア語を使いこなすゴンザに驚き、充分な衣類と給料を与え、母国語を忘れない為にもと、日本語学校を建て、その先生に任せられます。又、ロシア正教の洗礼を受けます。そして、一七三六年にソーザは四十二才で亡くなりますが、それから三年後の一七三九年、ゴンザが二十一才で亡くなるまで、精力的に七冊の辞典の編さんに取り組みます。実は、二人が亡くなった後一七四二年に、色丹、国後等にその教え子シェナヌイキンとフェーネフの二人が、通訳として、先遣隊の中に乗りくみ、更に奥羽地方と千葉県住民とも接しております。しかし、純粹のさつま辯が通ずる筈がありません。

「キユは、イッペコッペサレッモシタヤ、スツタイ、ダレモシタ、カナヂョカ、チャヂョカ」これは多分御承知でしょう「今日は一生懸命行きましたら大変疲れました。」皆さん

はお分かりでしょう。之では何回言っても通ぜず、双方ともダレやった事ゴワンソ。或いは「ケ、ケケ、ケ」つまり貝を買いに来んかと言ったかも知れもはん。又、「オマンサァタチャ、コゲンキエイナニホン語が、ナシテワカラントナ？」つまり、あなた達はこのきれいな日本語がどうしておわかりにならないのですか。と言って首をひねった事ゴワンソ。村山七郎氏によって初めて紹介された「日本語会話入門」でゴンザの授業ぶりを見ますと、その先生であるボクダーノフは、会話の入門と言うコメニウスのラテン語をロシア語に翻訳する際、言葉の前の庭としていますがゴンザは言葉の戸口前と訳しております。明らかにゴンザの訳が的確で、先生より上、つまり出藍のはまれというべきでありましょう。そして、その本のはじめに次のように呼びかけております。

サカシカワラベ、ナンダ（つまり元気な子供達よ）

＝此のサカシカは奈良時代迄は賢いと言う意味だったそうです。

キヤイ、ナラウフト（つまり来なさい。習う人。）

キエイナ、ニカコトバ（綺麗な新しい言葉）

イツ、オイガイヘ、キヤルカ（つまりいつ私の家に来られますか）

＝たぶんゴンザの家が教室になっていたのかもしれませんが。

イマ、ナロタアトカラ、ソゲン、ツイワスイエター

（つまり今習った後からそんなに忘れてしまつて）

丁度最近の私みたいですね。

ナシテ、ナラワンカ

（つまり何故習わないのか？勉強しないのか？）

申し訳ない事に、生徒の出来が悪かった印象を与える会話例になってしまいましたが、仮に出来が良かったと言っても、此の日本語では習う方も大変だったでしょう。

ゴンザ自身も、風俗習慣の違う別世界に放り込まれてずいぶんと戸惑ったようです。翻訳にも苦労の後が偲ばれます。

フォトゲン、イチデン（村山先生は仏は一代と訳されていますが）、仏は何時でも何時までもが正しいと思います。

イキヤ、ミイエ（息「靈魂」は見えない。）

フォドケ、カミノイキ（精靈なる神よ。此のイキとは呼吸の息であります。）

フォドケ、トト（父なる神よ）———となります。

靈魂を息としたのは、東西ともに語源的には同じ発想があり、名訳と言っても良いのかも知れません。軍事司令を奉行、元老院のメンバーを家老としたのは、それなりに苦心したという事でしょう。ブドー酒やウオッカの訳にも困ったらしく。アカカヨカサケ（赤ブドー酒）、ヨカサケ（ライン地方のブドー酒）これは、日本酒の事を菱刈や川辺地方でもヨカ酒と言っておりました。「アオモイ」つまり、「アワモリ」がウオッカ、「ヨカアマザケ」が上等のビール、「ショチュノマンフト」がブドー酒を飲まない人と焼酎を当てた例

もあります。逆に、飲んだために生じる状態は「イエロクサタサ」、或いは「イエクロント」酔ったという事になります。

露日語彙集から、またゴンザの言葉から、現代の鹿児島弁に通ずる語彙を拾うと際限がありません。その作業はあとにして、まずゴンザの言葉の中から、むしろ耳慣れないものを挙げてみます。その言い回しが全部残っている地方があれば、ゴンザの故郷（サツマ）のどこの出身かを知る手がかりになります。

語彙では、赤ん坊を「トトゥ」、病気を「イタゴ」、病気のとい時は「イタゴント」に変化しており、頭痛の事を「カミノイタゴウ」という言い方もしています。他に肺結核の肺は「フキ」となっています。此は切腹の腹から来たのでしょうか？五臓六腑の腑からでしょうか？強盗を、山坂達者？の「ヤマダチ」<sup>(山立)</sup>、これは山賊の事らしく平家物語や徒然草にも出て来るそうです。天とか空を「クモ」、宇宙を「クモン下」、コネは「馬のタテガミ」、敬うは「ココスル」つまり孝行する事でありましょう。親に孝行するのは親を敬う。つまり孝行するが、つまってココスルになるようです。言葉のつながりでは、わけを知らずに誰にでも罪をなすりつけるなを、「シタヂエナ、ダガマイエヂェム、トガライヤルナ」の文例があります。つまり、訳を知らずと言うべきところを、「シタヂエナ」と言っておりま。又、軽いは「カルカ」で、軽いものと言う時は語尾に「トント」をつけて、「カルカトント」としています。「オモシトカトント」は面白い、「オムカトント」は重いものとなります。ゴンザの言葉は年代がハッキリしており、発音がロシア文字でかなり正確に記録されている点で、比類のない言語資料となっております。それを見て、多くの人がまず気づくのは、今日の薩隅方言の特徴をなす音のなまりが、すでに生じている事でありま。う。

まず母音の ai の音は e に変わっており、ダイコンは「デコン」、大工は「デク」、貴族は大名をあて「デミュ」と言っています。シの音に続くラ行音も、すでに、タ行音に変化しております。例えば、しらがは「シタガ」、しらみが「シタメ」、知らぬは「シタン」、柱は「ファシタ」、頭は「カシタ」、卵の白味は「タマゴンシトミ」という風ですが、この言い方はかなり徹底して行われたようです。

牢屋は「ドヤ」、楽な国つまりヨートピアは「ダグナクニ」、布のラシャが「ダシャ」、乱ぐいは「ダンギイ」、これは田んぼの土堤がくずれない様にする杭であります。両替屋が「ヂヨガイヤ」、という言い方も見えます。いずれも、ラ行音がダ行音に変わったケースです。また、鼻を「ファナ」、畠を「ハダケ」、仏や神を「フォドケ」、イトコを「イトゴ」等のように、濁音化の例も見られます。撥音化、促音化はその兆が見えます。匂いをかぐを「カザム」、藁や干し草等積んだのが「コヅミ」、暗黒の意味のクラスミなどの言葉は、今の薩隅方言のカザン、コズン、クラスンという言い方に、かなり近づいているといえそうです。語尾のヌはすでに撥音化して、犬が「イン」、山犬つまり狼が「ヤマン」、という言い方をしています。促音化も、氷はすべすべしているは「シモガネヌメル」として

います。このヌメルは Numer と表記されています。語尾の母音が脱落しています。「ヌメツ」というところまではいっておりません。スイチョル（好いている、愛する。）の場合も同じ、（火を焚く）のタクは「TAK」、跳躍の跳ぶは「TOB」です。（川蝦）の意味も「ダツマ」ではなく、ダクマ「DAKMA」となっています。

ゴンザの言葉は、南九州方言が特殊化していく過程を示す実例として注目されますが、一方では、古式の音を数多く保存している点でも注目されます。

例えば・・・日口会話入門集で

コナタンイエ チェノヂェ アノフトト、ク。

（お前の所に彼と共にいくだろう）

行くが来るで、来るが行くと反対になるのが薩隅方言の特徴でしょうか？

ソノフタ、フォドケン、マイチェヂ、オロヨカ、マタフトト、ニクム

（その人は、神の前ではいとわしく、つまりうとましく又はいやがられ人には憎まれる。）

と訳してありますが、この「オロヨカ」もずいぶん古い言葉と思われます。或いは、「オルヨリは」とも思いますが、この「オロヨカ」の言葉は正しくはどうなのか、皆様に教えて頂きたいのであります。

この文例にみえるフト、フォドケは、言うまでもなく神・仏のことです。ここではhの音は使われず、すべてfの音で表記されています。例えば、飯米つまり食料は「ファンメ」、鼻の穴のハナンスが「ファナンス」、ホラとかウソは「ファラ」、フザケ合い、フザケッコは「ファラグリュスル」、「フエキ」はユダヤ人のヘブライ語も同じだそうです。背骨です。文例のチェヂェ（連れだつて）は、今なら「テノデ」というところ、テ、デはチェ、ヂェと言っています。たとえば、父親のテテが「チェチェヤ」、編み細工のテゴが「チェゴ」、手のヒラが「チェノファラ」、乳で育てることを「チチヂェオヤカス」などとなっています。またこのころすでに、南蛮渡来の言葉が日用語化していたらしく、「カップ」つまり（雨合羽）、「バンゴ」これは（ベンチ 縁台の事でよく茶の湯の椅子として使われます。）、「シャボン」は（石けん）、「ビドロ」は（ガラス）、「ボブラ」は（かぼちゃ）などの語彙が記録されています。ゴンザの弟子たちは、鹿児島弁だけでなく、オランダ語やポルトガル語まで勉強していたことになります。ロシアでは、特別功績のあった人達は、肖像画やロウ人形を作らせる習慣があったそうですが、先程申し上げたその肖像画のことは、先程来日したゴレグリーヤード氏に懇願しておきました。村山七郎氏らは、レニングラードのクンストカーメラつまり（ピョートル大帝の収集品を保管した陳列室）に、ゴンザとソーザのデスマスクがあることを報告しています。デスマスクはもうなにも語りませんが、二百五十年前の『語彙集』を繰ると、先祖のたちの生きづかいが聞こえてきそうな思いにとらわれます。中には、すでに死後と化しつつあるサツマ語や使われなくなったロシア文字もあります。その意味からも、日本、ロシア両国にとって貴重な文書なのであり

ます。この前、MBCテレビで「ヒナジョ」つまり人形を下さいとか、「チャノコ」つまり朝飯を食べましたかとか、又「ナイモンをタモンセ」つまり「葉の葉を下さい」と外人のリポーターに言わせ、昔の言葉なので、店員が困っているシーンが放映されました。此も全国放送され好評だったようです。

実は、ゴンザとソーザの死後三十四年して、青森から五人の漂流民が来て日本語学校の先生をさせられます。その日本語訳は極めて幼稚で、例えば「なんなりと話すことが必要だ」というロシア語の訳として「きさまをイります。なんてもさへりましょう。」となっており、ゴンザの訳よりはるかに劣るのであります。ゴンザは又デユイ屋即ち女郎屋のことを「ワリコトスットコイ」と訳しています。彼には女郎屋の経験は無かったのであり、一途に悪いところと思い込んでいた様で、誠にいじらしい限りであります。又、暖炉に対する囲炉裏の訳が出て参ります。私達の子供の頃は、父母の座る所も決まっていた、ドンドン火を燃やししながら昔話等くり返し聞かせて貰い、時にはユデ卵等貰って喜んだものでした。恐らく、ゴンザも十一才になるまでに一家団らんの過去があった筈で、それを思い起こし、恐らく感涙にむせんだこともあったでしょう。そして、先程今で言うフザケッコつまりハラグレの訳も出て来ましたが、文字通り、竹馬の友と竹馬に乗って遊んだ事もあったであります。鶴でさえ古里のシベリアへ帰って行きます。この辞典を書き終えたら帰して貰えるのでは無いかと、全力を尽くしたのではないのでしょうか？鶴の様に首を長くして待つ母や兄弟の元へと、いわゆる激しい帰巢本能におそわれたに違いありません。私も、シベリアの収容所から仮今這ってでも日本へ帰りたかったし、逃げおうせるものなら逃げ出したかった記憶があります。しかし、私には苦楽を友にした千人もの戦友が居りました。ゴンザは辞書を書き始めた二年から三年の間は、ソーザが死んで唯一人になっていたのであります。

ゴンザが余程すぐれた才能の主であったことは、有名な東洋学者ブイ・バルトリドが「欧州及びロシアにおける東洋研究史」の中で、「この天才的な青年は、当時の人の批評によれば上手にロシア語で自分の意見を述べ見事に日本語を教えたということである。」と記しておる事からでも分かります。一つは、若かったせいでもあります。大事な事はボクダーノフの指導が宜しきを得ていたこと。労働者出身のボクダーノフの、日本青年に対する深い愛情があった為と思われます。愛情に裏づけされた教育が如何に大きな成果をもたらすかの実例を、この辞典が示しております。又、この辞書の中に私舎というのがありますが、島津藩が青少年教育の為、塾に似た舎というのをアチコチに設けましたので、そこでふたりともカタカナを習ったのかも知れません。或いは、二十三才年上で二年前に死んだソーザから、教わったかとも思われます。因みに、大口には向学館、菱刈には秀成舎、本城に尚志学舎などの私舎があったようで、他に各地のお寺で教えたいです。

尚、ゴンザやソーザの出身地が何処であったかは、方言の分布状態から見て串木野辺りか、それより少し南と、元鹿大教授がおっしゃっています。上村先生です。或いは鹿児島



か知覧辺りではないかと別の方の説がありますが、廃仏棄釈でお寺の過去帳も無くなり、墓も納骨堂に改められ、昔の墓石は埋められたが為に手がかりが殆どありません。今後、納骨堂にされる時は、墓石は脇に保存して頂きたいものであります。僅かな望みは、税金や賦役の為に一軒一軒の戸主を調べて記帳させた門割制度による名寄帳（つまり名集帳）のみであります。若しも、その様な類がありましたら、図書館か天文館キモノよしむらへお知らせ頂きたいのであります。

実は、私の祖父は竹下重左エ門重秋であります。普段は重左、重佐と呼ばれておりましたのでゴンザは權左エ門、ソーザは宗左エ門ではないかと思われれます。又、權造と宗造かとも思われれます。皆様方の中に、少しでも情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひお知らせ頂きたいのであります。そもそもゴンザの辞書と私との出会いは、約九年前、残留孤児の里親を引き受けております関係上、兵庫県加古川市の孤児の所へ行きました序に、先程申し上げました湯通堂長大氏へ面会に行きました。これも全く孤児が取り持つ縁ではありますが、土産に貰ったのが、村山七郎先生著作の新スラブ日本語辞典であり、まだ里帰りしていない辞書が六冊残っている事を知りました。「アー。これだ。この本の残りを里帰りさせる事こそ私に課せられた使命だと言うことを感じました。」おこがましい事を申し上げる事をお許し下さい。「天の將に大任をその人に下さんとするや、先ずその心身を勞せしむ。」という先哲の教えがあります。この仕事は、無学の私にとっては將に大任でありました。シベリア抑留四年間の苦勞こそ、その心身を勞せしめた神の摂理であったと悟ったのであります。そして、今になってみれば人生に無駄はないという事であります。そして又、「チェストイケ」の言葉こそ、ゴルバチョフやエリツィンに直接体当たりせよという事であると信じ、関ヶ原島津勢の中央突破の真似をしたのであります。それから約一〇年間、同じ文句、これでもか、これでもかと、毎月毎月直訴を続けました。しかし何の返事も無く、昨年六月、遂に諦めかけました。ところが、七月になってヒョッコリと返事が参りました。唯コピーしたので良ければ、七万七千円。これは、今のロシアのインフレでは八〇〇万円位の価値があるそうです。若し、現品をこちらへ持ってきてのコピーであれば、二人分の旅費・宿泊費・保険料等で二百五十万円。ロシアの金で二千五百万円位とのことであります。勿論、現品は譲れないとの事でしたので、コピーだけ送ってくれと七万八千円送金しました。そして又、約半年の間ウンともスンとも言ってきましたので、遂に思いあまってサンクトペテルブルグへ直接電話致しました。「ゴレグリヤード氏は居ないか」と言いましたら、「彼は日本へ立ちました。」との事で滞在先も分かりました。因に、電話料も五千円位を覚悟していたのですが、一分間三百四十円だけでびっくり致しました。この電話をかけたのも「チェスト・イケ」の成果でありました。これなら、今までのも電話で済んだのにと思いました。

ここで、本題を外れますが、ロシアには「百里や千里は距離でない、十年や百年は日数でない。」というノンビリした大陸的性格を表す諺があります。ロシアとの領土交渉も一

気呵成、イエスかノーかの日本的な尺度では無理であろうかと私は考えています。

そして又、ゴンザ著書の里帰りが実現して、つくづく感じますことは、西郷南州の「子孫のために美田を買わず」の裏返しは「心財を積み」、つまり「こういう形での心の財産を残せ」と言うことではないか？又、明治維新の頃活躍した、山岡鉄舟の遺言「財積みて財残すとも、子孫必ずしもこれを残さず」。即ち、財産はあてにならない。「書積みて書残すとも子孫必ずしもこれを読まず」つまり学歴も活用次第である、という事でしょうが、「宜しく、陰徳を冥々のうちに積み、つまり隠れた人徳を人に知れないようにしつつ、子孫長久の計となすに知かず、つまりそれでこそ子孫がいつまでも栄えるのだ。」多少原文とちがうのですが、分かり易いように、以上受け売りを申し上げまして、恐縮でございます。

最後に、今更乍ら考えますことは、私は、商売に出れば夜の九時半頃迄廻ります。旅館での夕食を済ませば十時半であり、それから大統領あての手紙の文面を考え、書き終えたのは夜明けになる事が何度かありました。そのために居眠り運転で、えびの駅傍の踏切遮断機をこわし、莫大な弁償を請求されました。また、運転中何時の間にか、車が右に寄って行き三回排水溝に脱輪しましたので、当然家庭では宮沢りえのテレビコマーシャル通り、スッタモンダがありました。スッタモンダを飲みました。しかしその都度、ゴンザの霊が守ってくれて命拾いをしたのではないか、と思う今日この頃でございます。此の上は、今度の事で天狗にならぬ様、充分自省自戒して参らねばとも考えております。

本日は、ゴンザが、大勢の皆様に此の事実を知って頂き、嘸喜んでいられる事と思います。以上、無学な私の話を永々と御静聴下さいまして、ゴンザの霊と共に御礼申し上げます。最後に学長・館長様が並々ならぬ御高配で此の由緒ある県立短大で定員を遥かに超え、しかもこの様な企画第一号で御指名下さいました事に対しまして、重ねてお礼申し上げます。皆様本当に有難うございました。